

で行た者はそれで宜いが、可愛相に今小町と云はれた評判娘のお糸さんも病氣の爲に頭の毛が脱けて、矮鶏ちやうけいの様な實に見る影もない有様、今は磯家裏の奥の端で、二帖敷の納屋同然の處で、疊といふたらえゝけども、たゞと云ふたらみのない、しんが出てゐる、着物は單物と袷と綿入と帷子と四季の着物を一遍に着てる。肩が袷で背中が單物で腰の處が破れて帷子のつぎが當つて裾が綿入れになつてゐる。缺けた行平でお粥を啜るのがどうなりと云ふ有様や。あの時にお前さへ養子に行て呉れたら、雑穀八の家は潰れはせぬのぢや、お前が潰したと云ふのが無理か、何んぢや豪さうに禿茶瓶やなんて、私ぢやとて、何も好き好んで間暇ひまにあかして一本／＼抜いた譯ぢやなし、年がいけば勝手に抜けるんぢや、老耄らうぼうもしますわい、何じや豪さうに、江戸ツ子を使ふて、啖呵たんかを切つて、どうや、グツとでも云ふてみい」

「イヤ御尤もで、あの節私は養子に遣つて貰ふつもりで居りましたが、友達のお申しすには小糠三合有つたら養子に行くなどの譬の通り、身代を殖した處で、先方は以前から有るねと云ふし、また無くしたら養子が使ふたと云はれるし、養子程つまらん者はない。お前も男やないか、立派に婢を貰ふたら何うやと云はれましたので、急に嫌になりまして、東京へトツ走りしました。叔父さん私から雑穀八へ養子に参りました、以前の身代には成らずとも、せめて一軒の店でも出しましたら世間の人は何と云ひませう」

「そらそう成つたら世間の人はお前さんを褒めますがナ」

「一ツ私を雑穀八の娘さんが居る磯家裏へ養子にお世話願へますまいか」

「コレ鶴さん、お前さんも物好きな人ぢやナ、以前と違ふて美しい事は無いで、先にも云ふた通り、病氣で毛は脱けて随分見にくいで」

「イヤそら承知です。病氣は癒して、毛の脱けた處は、青菜と米を食はして、日當りの宜い處へ圍ひます」

「まるで鶏ぢやがな」

「貴郎に先程から云はれて見ますと私が悪うございました。養子に御世話願ひます」

「宜い心掛けぢや、鶴さん、そんなら、お糸さんに話をして來る」

と話を致しますと、何しろ惚れた男やもの厭も應も無い。

「こんな汚ない所でも宜敷かつたら」

と、話が出来ました。

「叔父さん、此處に三百圓ござります。これは私が東京で世間の附合もし、食ひたい物も食ひ、飲みたい物も飲んで残つた金、此金は私が店の一ツも出せる様に成るまで、お預かりを願ひます」

「ハイ宜敷い、確に預りました。貴郎は感心な人ぢや、生馬の眼でも抜くと云ふ東京で三百圓の金を